



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



信仰の鍵は黙々と生き続けること

今年のザビエル祭で郡山司教がメッセージ

聖フランシスコ・ザビエルの鹿兒島上陸を記念する恒例の「ザビエル上陸記念祭」が、上陸記念日の八月十五日(水)鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂であった。この日の記念ミサには二百八十人余りの信徒が参列し、聖ザビエルの偉業を称えるとともに聖母の被昇天祭に当たり、聖マリアの生き方を黙想した。またこの日が終戦記念日にも当たることにも因んで鹿兒島ユネスコ協会と協力して「平和の鐘をならそう」を行い、ミサ後の正午過ぎ、鹿兒島の空にカテドラルの鐘を響かせ平和を祈った。

今年のザビエル上陸記念祭も祇園之洲からザビエル教会までを歩く「ザビエルウォーク」と「聖母被昇天ミサ」、そして鹿兒島ユネスコ協会と壮年連合会共催の「平和の鐘を鳴らそう」の三部構成で行われた。



猛暑の中ザビエル教会を目指すウォーク参加者

でも、猛暑だったこの日、ロザリオの祈りを唱え汗だくになりながら三キロの道を巡礼した。また手違いから少し遅れて祇園之洲を出発することになったフイリピン人ファミリー二十人も揃いの黄色いTシャツを着て元気にザビエル教会に到着した。ザビエルウォークの後、ザビエル教会で

祇園之洲にあるザビエル上陸記念碑前を出発したザビエルウォークの参加者は約五十人。国道十号線沿いに聖母被昇天のミサがささげられるザビエル教会を目指した。昨年までのウォークと違ったのは、聖ザビエルと忍室和尚の心の交流が展開された「福昌寺」跡に立ち寄りなかつたこと。それ

「聖母被昇天ミサ」がささげられた。郡山司教と司祭十一人これに助祭五人が加わったミサには「平和の鐘を鳴らそう」の鹿兒島ユネスコ協会やプロテスタントの兄弟たちの姿も見られた。

ミサ中説教した郡山司教は、ルカ福音書の「マリアの歌」を取り上げ、その内容とマリアの身の上に関する現実にギャップに言及した。そして「悲惨な生活に陥ったとも言えるマリアだったが、それでも彼女は大きな力の中で信仰生活を送り続けた。このマリアの黙々と生きる姿こそが信仰の鍵になる。私たちも困難は神が鍛えて下さっていると思ひ、人を恨まず、自分の身を嘆かず、黙々と生きること、周囲に私たち信者の強さを感じさせよう」とメッセージを送った。

を願ひ、東日本大震災と第二次世界大戦の犠牲者のために黙祷をささげた。その後、田中弘允鹿兒島ユネスコ協会長からユネスコの活動と平和実現のためのキーワードについて解説があった。田中会長はノーベル平和賞受賞者によって作成された「マニフェスト二〇〇〇」を取り上げ、一人ひとりの心に平和を築かなければ真の平和の実現はあり得ないと力強く語った。

またこれを受けて挨拶した郡山司教は鐘を鳴らす意味について触れ「人間は心が響きあうもの。だから平和について学んだ私たちは

パウロ糸永真一名誉司教
司祭叙階六十周年記念式典
にち 9月17日(月)
鹿兒島カテドラル・ザビエル記念聖堂
16時 感謝ミサ
17時 祝賀会(教会一階ホール)

新風

「願わくは日々御身の尊き御体に触るる司祭の手を潔く保ち給え。御身の尊き御血に染まるくちびるを汚れなく護り給え。」と私たちは日々司祭のための祈りをささげる。

今月私たちは糸永真一司教様の司祭叙階六十周年を祝う。この祝いは私たち全員の喜びである

祈りの勝利

と同時に日々司祭のために「祈り」の勝利の日でもある。司祭のための祈りと同時に私たちが大切にしている祈りの一つに「御召を求むる祈り」がある。「主イエスよ、主はかつて使徒たちに向いて『穫り入れは多けれども働く者は少なし。故に働く者をその穫り入れに遣わさんことを、穫り入れ主なる御父に祈れ』と宣えり。」で始まるこ

の祈りによって多くの人が司祭に叙階され、多くの修道者が誕生した。召し出しの困難な時代だからこそ「祈り」の勝利を信じた。世俗化が教会を襲ひ、信仰の危機が信者一人ひとりに及んでいいる今、教区全体で取り組もうとしているのも「祈り」である。公的な祈りだけでなく、私的な祈りを大切にしたい。遠くの祈りではなく、日常生活の真つただ中にその意向を見つけた。そんな意味で「ノベナ」の祈りが始まった。祈りには偽りがなく、真理だけがある。祈りには憎しみはなく、愛だけがある。祈りの中には仮面の自分はいない。本物の自分しかない。そんな思いで行う祈りを主が聞いて下さらないわけがない。祈りの勝利を信じた。 (教区本部 寝占敦之)

2012年教区評議会

キリストを信じる喜び
—祈りの小教区づくり—
日時:9月9日(日)
場所:ザビエル教会と教区本部

- 9時 司教ミサ
- 11時 司教講話
- 12時 昼食
- 13時 分かち合い
- 15時 全体会
- ※全体会後聖体賛美式があります。

スケジュール

ザビエル祭を前に
聖師縁の地を巡る
ザビエル上陸記念祭を前にした八月四日(土)教区巡礼委員会主催の「ザビエルの足跡を辿る旅」が実施され、約二十人が鹿兒島県内にあるザビエル縁の地を巡った。

朝九時過ぎにザビエル教会を出発した一行は、ザビエル上陸記念碑や福昌寺などを訪問した後、伊集院一宇治城、東市来の鶴丸城へと足を進めた。そしてその後、川辺のクリシタン墓地も訪問した。今回の巡礼には郷土史家も同行し、各地で詳しい説明が聞かれるなど有意義な旅となった。

修道会だより

それぞれの場合、平和への祈りを響かせて欲しい」とこの活動の意味を語った。田中会長と郡山司教の挨拶の後、まずこの二人の手によって鐘が打ち鳴らされ、その後は希望する参列者たちによって終戦記念日でもあり、ザビエル上陸記念日でもある入道雲漂う暑い八月十五日の空に鐘の音が届けられた。

▼イエスのカリタス修道女会が創立七十五年 鹿兒島市や奄美大島で教区のために働いているイエスのカリタス修道女会が七十五年を迎えた。同修道会は一九三七年八月十五日宮崎に誕生した。現在では世界十五カ国で千人もの会員が小さな人々のために働いている。

▼聖血礼拝修道会で誓願式 八月十七日(金)溝辺町の聖血礼拝修道会聖ヨセフ修道院で初誓願と誓願更新の式があった。

郡山司教が司式したミサの中で初誓願を宣立したのはマリー・ジョアンナ修道女。このほか三人のシスターが誓願を更新した。この四人のシスターは皆、ベトナム人。

文芸

俳句

鹿兒島純心 川上 和
つゆ草や苔むす墓碑の天の声

雲高く崩れんばかり原爆忌
出水市 沖 弘子

赤まんまザビエルウオークしごき歩く
鹿兒島市 徳永ノブ子

亡き夫に祈り語りの墓掃除
愛光園 春山マリ子

天国に居ること信じて夏の部屋
霧島市 政 ノブ子

聖信式恵みを受ける無垢の薔薇

短歌

鴨池教会 前田 儀子
ゴヤの絵の暗き深さは沈みゆく夕日が宇宙のすべてを織ること

愛光園 春山マリ子
いつの日も平和よ来いと待っているその夢受けた祈りの言葉

奄美市 林 常広
被爆した悲しみ聞きつ悲惨な目戦争の中

現在を伝えし

鹿兒島純心 川上 和
山路こえオリーブ丘のユダの町二色の絆
賛美のこだま

詩

始良市 K・K

生活保護を受けながら

一心に職を求める青年の姿が放映された
頑張つて資格も得たが就職はむつかしい
アパートの一室で

朝食昼食なしの夜食だけ
毎日が斎食ではないか
深い吐息の中

私にマザーテレサの祈りが浮かんだ
「主よ、私が空腹を覚えるとき
パンを分ける相手に出会わせてください
喉が渇くとき

飲み物を分ける相手に出会えますように」
テレビの画面に瘦身真剣な眼差し
私も祈つた

「主よ、私の飽食から取り上げて下さい
朝のパンを 昼のパンと飲み物を
絶えざる希望を彼に与えて下さい」

生きる 祈りについて考える 終身助祭 川口 茂

「人はなぜ祈るのか」この素朴な疑問には、それぞれが自分の経験を振り返ることによって答えられるのではないだろうか。それは難しいことではなく、私たちはいつだってこんなときにお祈りをしてきたか、というのを思い起こしてみればいいのです。記憶を辿れば嬉しいときも、悲しいときも、いつでもどこでもすぐその場で何らかの祈りをしていたはず。ということとは、心の一番深いところにあるものが「祈り」と言えるのではないのでしょうか。

の対象が必要となります。祈りが「おまじない」や「不思議な呪文」のようなものではなく、真の祈りとなるためにはその対象、つまり神である私たちの主イエス・キリストへの理解が不可欠になります。確かに苦しいとき、困難なときにはすぐさま思い出して、何もなくてもすぐその場で行うことができるのは祈りです。しかし、聖アウグスティヌスは著作の中で「知ることなしに、だれがあなたを呼び求めることができましよう。知らないならば、別のものをそれと思つて呼び求めるかもしれせん」

と神様に訴えています。祈りが「祈り」であるためには、まず神様を知ることが前提となります。次に、祈りを通じて神様との関係を深めるからこそ「祈り」なのです。実に、神様の恵みとは「もの」ではなく、この深まる神様との「関係」のことなのです。それゆえに、祈りは一番大切にすべきものであり、身につけるべき習慣でもあり、そして生きるための大事な知恵でもあるのです。どうか祈ることを生涯にわたつて決し



ミサ後のちよつとした楽しみです!

信徒の交流の場・谷山教会コーヒーショップ



人の輪が広がります

谷山教会で主日のミサの後の楽しみとなつて紹介しているコーヒーショップをご紹介します

ミサが終わると、ホールにスタッフが集まり、コーヒーショップの場作りが始まります。集まった人たちは足りなくなつた椅子やテーブルを追加していきます。集う人は二十、三十人。片づけまで参加者が協力するコーヒーショップです。豆を挽き、こだわりの水で入れるコーヒーは小さなお菓子が一つ付いて一杯百円。美味しいコーヒーを

飲みながらおしゃべりしていると、ふだん話せない人とも自然に顔の見える関係になつていきます。話題は世間話、健康のこと、その日のお説教など色々です。このコーヒーショップの始まりは、一人の女性信徒の「教会の信徒を兄弟姉妹と言うけれども、話したことのある人は少数というのが現実。転入したとき感じた教会の閉塞感を何とかしたい」という熱い思いから

でした。いろんな人たちが話をして顔見知りになつていく、そんな親睦の場を作る目的から始めて十年あまり続いています。ここでの収益は教会のイベント(草刈り、掃除、聖信式後の茶話会等)の茶菓子代になつていきます。教会のスリッパ購入に充てられたこともありました。またコーヒーショップがあるからミサに来る楽しみがあるという声もあります。コーヒーショップのことをよく知らなかつた谷山教会の方、他教会の方、信徒以外の方なども、皆さん一度足を運んでみませんか。紅茶もありますよ。(谷山教会レポーター)

て怠らないでください。郡山司教の今年の年頭書簡は「祈りがごたまする祈りの教区になることを願っています」という言葉から始まりました。そしてこれを受けて三月からノベナの祈りが始まりました。私事ですが、このお祈りを通じて近ごろは、神様とのつながりが更に強くなつた新しい自分を発見しています。九月九日に開催される教区評議会では「キリストを信じる喜び」というテーマのもと、「祈りの小教区づくり」ということを課題として分かち合いの時間が設けられると聞いております。実り多い会議となつて、私たち鹿兒島教区がますます活性化への道を強く歩んでいきますようにと心から願っています。(了)

日本カトリック障害者連絡協議会 30周年記念名古屋大会に参加して

谷山教会 今村 乙野

梅雨明けが待たれた七月十四日(土)、十五日(日)、名古屋市内でカトリック障害者連絡協議会の全国大会が開かれた。同大会は三年おきに開催地が変わり、今年が「第十一回」の三十周年となる名古屋大会だった。大会には沖縄県を除く全国各地から四百人余りの参加者があった。日程は、議事の進行、日程もスムーズで感動的な体験となった。

「障害」は知的障害、身体障害、聴覚障害、視野障害、精神障害、発達障害と区別されている。大会はプログラムに沿って進行されるのだが、同時に行われる言語通訳、手話通訳、また画面に速記で内容が記されていくなど、丁寧に会場に状況が伝えられていくことに感動した。日頃、障害が



参加者が丁寧な会の雰囲気の中で心が一つになり、笑顔で大会が終えられたことはとても美しく感動的だと思つた。二日間の「障害」「障害者」を学ぶ体験は無知だった私にイエス様が与えてくれた大いなる恵みとなった。

ようこそ！アントニオさん

韓国人助祭を迎えた鴨池教会

七月十五日(日)から今年の一ヶ月間、韓国人助祭に叙階されたアントニオ助祭(本名チョン・ポフ・チョン)が、来年度の司祭叙階の準備と日本語の勉強のため鴨池教会に赴任されました。

鴨池教会は鹿児島大学に近く、留学生もたくさんいて、国際色豊かな環境にあります。



境にありません。神の計らいか、赴任から数日後の二十一日(日)には韓国からの留学生が洗礼の恵みを受けられました。この二つの喜びを神様からの大きな恵みとして感謝いたします。また日本語やよき文化が

一日でも早くマスターできるように積極的に交わりを持ち、少しでもお役に立てればと願っています。

来年度の司祭叙階に向けて、神様の祝福と恵みが助祭の上に豊かにあり、良き準備ができますように鴨池教会信徒一同祈りをささげて、司祭叙階の日を楽しみます。

森山神父を招き神の愛を学ぶ

今年のカトリック幼稚園教職員研修会

七月二十六日(木)と二十七日(金)の二日間、「第四十三回鹿児島教区カトリック幼稚園教職員研修会」が霧島市のホテルで開催され、教区内各地から百二十六人の幼稚園職員が参加した。

にしていきたいと思えます。そして七月二十九日(日)から三十日(月)までマリア山荘で教会学校のキャンプを行い、アントニオ助祭、大田聖神学生(鴨池教会)も子どもたちと夏を満喫しました。(泉広海レポート)

新たに韓国人神学生

イ・ビョンドクさん



今年の研修会の講師には森山信三神父(福岡教区)を招き、「神様の愛を伝えるために」(演題)について講話してもらった。幼稚園で園長を務める森山神父は、現場の体験をもとに幼稚園での身近な出来事やそ

鹿児島教区にまた一人お隣り韓国から神学生が恵まれた。彼の名はイ・ビョンドクさん(霊名・ビアンネ)。熊のように大柄な体に、優しい笑顔が魅力的な三十七歳である。現在、仁川カトリック大

祈りは神の愛のしるし

司教執務室だより

教区評議会を前にして思うことがあります。テーマは、祈りの教区を目指してということですが、祈りの教区になるといつても、どんな教区のイメージを持っているかと聞かれると今一つはつきりしないのではないのでしょうか。

私の場合はこうです。まず、一五四九年にザビエル様によってこの鹿児島にまかれた福音の種が、瞬く間に日本中を席巻したこと、一七〇八年には、鎖国に終止符を打つことになった明治維新の陰の立役者シドゥチ神父が屋久島に上陸されたこと、この二つの出来事から話さなければなりません。これらはまさに日本の夜明けを告げるものでした。鹿児島教区は日本の精神文化発祥の地と言っても過言ではありません。一五四三年の鉄砲伝来にしても、鹿児島から近代日本のすべてが始まったのです。そんな地で信仰生活を営んでいることは単なる偶然ではありません。神様の深い思いがあるのです。鹿児島教区の信者には神様から託された特別の願いがあるのです。それが

祈りの教区になるということなのです。

日本は祈りの雰囲気が少ない社会です。ということばは神様と一緒に生きていないということばです。神様は、祈りながら放蕩息子の帰りを待つ父親として日本の社会を見ておられるに違いないのです。鹿児島教区に求められているのは、そんな父なる神と心通わせながら祈る人々で満たされる教区であって欲しいということばです。それこそザビエル様が伝えたかった父の心、福音であり、世話係の長助、おはるといふ老夫婦の回心を促し、地下牢ですべてを捧げたシドゥチ神父の信仰だったのです。なによりも「なれかし」と答えて天使のお告げを受け入れたマリア様は、ベトレヘムでの宿探しにエジプトへの逃避行など、次から次と思いがけない苦難に襲われました。にもかかわらず、マリア様には、一つひとつを受け止めながら、黙々と、なれかしという初志を貫かれたイメージがあります。

マリア様とともに、鹿児島島の信仰の先人たちに共通するのは、この黙々となれかしを生きて祈りの姿であり、これこそが私たちに期待されていることに違いないのです。



司教が加世田訪問

七月二十二日(日)、春の人事異動後初めて郡山司教が加世田教会を訪問してくれた。



この日の加世田教会には、加世田とその巡回教会枕崎のフィリピン人信徒、また当地出身の修道者、そして現在他小教区に籍を移している信徒も駆けつけるなど、六十人余りの信

者で聖堂がいっぱいになった。ミサ後は郡山司教を囲んで記念撮影をし、フィリピンの人たちと司教の「マノ(祝福)」も始まり、一段と和やかな雰囲気になった。その後の昼食を兼ねた持ち寄りパーティイではフィリピン料理やベトナム料理も振る舞われ、英語やタガログ語、日本語の歌も飛び交うなど小さな教会は国際色で溢れ、活気に包まれた一日となった。(加世田教会レポート)

9月の会と催し

- 2日(日) 年間第二十二主日
- 8日(土) 聖マリアの誕生
- 8日(土) 宣教学校の集い・教区本部・13時30分
- 9日(日) 七田和三郎神父命日(一九八九年)
- 9日(日) 年間第二十三主日
- 10日(月) 教区評議会・カテドラル・9時
- 10日(月) 司祭評議会・教区本部・14時
- 10日(月) 教区司祭会・教区本部・16時
- 10日(月) 定例司祭集会・教区本部・10時
- 11日(火) 十字架称賛
- 14日(金) 糸永真一名誉司教司祭叙階記念日(一九五二年)
- 15日(土) 鹿児島教区司教座教会献堂記念日
- 16日(日) 年間第二十四主日
- 17日(月) 奄美の宣教司牧を考える会
- 17日(月) ロベルト神父霊名(聖ロベルト)
- 17日(月) 坂本進神父のホリスティック聖書講座「マタイ六章 信仰と病氣」・ザビエル教会集会室・10時・五百円
- 18日(火) 糸永真一名誉司教司祭叙階六十周年感謝ミサ・カテドラル・16時
- 18日(火) 奄美地区例会
- 21日(金) 聖マタイ使徒福音記者
- 23日(日) 年間第二十五主日
- 23日(日) ダニエル神父命日(二〇〇三年)
- 23日(日) バルビニ神父命日(二〇〇四年)
- 27日(木) オリブの会・教区本部・14時
- 27日(木) 世界難民移住移動者の日(献金)
- 27日(木) メニヒ神父叙階記念(一九五九年)
- 28日(金) 松永正男神父霊名(聖ピセンチオ)
- 28日(金) ロベルト神父叙階記念(一九七五年)
- 29日(土) 聖ミカエル 聖ガブリエル 聖ラファエル 天使
- 30日(日) テイエシ神父霊名(聖ガブリエル)
- 30日(日) 年間第二十六主日
- 「アベナの意向」 6日・14日 糸永司教のため

ザビエル書院の窓

渡辺和子 著
置かれた場所で
咲きなさい
幻冬舎 価格 千円



風に運ばれた所で力強く芽吹いていくタンポポの種子のように、自分の置かれた環境を恨まず、嘆かず前向きに生きていこうというメッセージが溢れている。

キリシタンの歴史 七

フランシスコ・ザビエル(上)

溝辺教会主任司祭 坂本 進

一 ザビエルの印象

一九九九年には、ザビエル日本上陸四五〇年記念祭が、二〇〇六年には、ザビエル生誕五百年祭が、それぞれ盛大に行われました。鹿児島では毎年八月十五日に、鹿児島上陸記念地とザビエル教会で、ザビエル上陸記念祭が行われています。鹿児島の方々はよくご存じの通りです。

ザビエル神父は、神以外のものは、如何なるものも怖れず、神への信頼こそ、すべての危険に打ち勝つ勇気の源である、と確信していました。

そして、ザビエル神父の心にもあったものは、「より大なる神の栄光のために(Magis)」であったことを、アルペ神父さまは記しておられます。(同書 二二二頁)

二 ザビエルが伝えたもの

ザビエルがどういう人であったかについて、元イエズス会総長、広島で被爆され、日本管区長も歴任されたペテロ・アルペ神父さまはこう記しておられます。

ザビエル神父が、日本に伝えたものは、何であったのでしょうか。それは、唯一神であるキリスト教の神を伝えるということでした。そして、それに付随し、キリスト教文化圏である西



洋の文化と文明を伝え、東西文化の交流を計るということでもありました。このことは、イエズス会士・結城信光神父さま、尾原悟神父さまも、言及されておられます。(結城信光『ザビエルと日本』『東洋の使徒』一九九九年 三四〜五頁。尾原悟『ザビエル』清水書院 一九九八年 四三頁)

「キリスト教の神とは何であるか」を、汎神論的文化の土壌にある日本に伝えること、このザビエル神父は、彼の生き方を通して、彼が信じていたの神を伝えようとしたのです。生き方と宣教は、分かつことはできず一つなのです。彼の書簡集から、彼の言葉を聞いてみたいと思います。

「私は今度のマラッカへの旅に、神が大いなる恩寵をお与えくださることを、希望している。何となれば、私をあの国々にお送りになるのは、神ご自身であることとを、私にお知らせになった時、同時に、私に深い平

スーさん(鈴木助祭)のやさしいみことば

聖書の文化的背景

聖書を読む際に大切なことのひとつに当時の文化的背景を理解しておく、ということが挙げられます。こうしたことを踏まえ、イエズス様がヤイロの娘を生き返らせたエピソードを読み返してみましよう(マルコ五・35〜43)。イエズス様が会堂長ヤイロの娘の家に着くと「娘が亡くなった」と人々が大声で泣きわめいて騒いでいました。そして、彼らは「(娘は)眠っているだけだ」と言われたイエ

ズスをあざ笑いました(五・39〜40)。なぜ、人々はイエズスをあざ笑ったのでしょうか。もし、彼らがヤイロの娘の死を心から悼んでいるのなら、ラザロの死を悲しんだマルタのように、イエズス様に「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

というようなことを言ったはずですが(ヨハネ十一・21〜22)。彼らがイエズスをあざ笑ったのは、単にイエズスを信じていなかった、ということだけではありません。実は、彼らはヤイロとも娘とも何の関係もない「泣き女」だったからです。泣き女とは、主に葬儀の時に遺族の代わりに「悲しい」「辛い」「寂しい」等を表現するために大袈裟に泣きじやくることを仕事にしている人たちのことです。当時、葬儀にあたって泣き女を雇うことはユダヤ人たちの習慣でした。さて、イエズスは彼らを家の外に出し、子

どもの両親と三人の弟子たちだけをつれて娘がいる部屋に行きます。そしてイエズスを信じる者だけが奇跡を目の当たりにするので

このエピソードは、ヤイロの娘が死んだことを聞いても「恐れることはない。ただ信じなさい」というイエズスの言葉から始まりま

「霊的生活とは、人間が神の恩寵に協力したてまつる生き方である。このザビエルの師イグナチオのことは、そのままザビエルの霊的態度である」(二四七〜八頁)

ザビエル神父は、この「霊操」の精神をもって、日本人にキリスト教を伝えようとしたのです。これは、イエズス会の布教・学校教育の基本となる『イエズス会学事規定』の精神でもあり

(次号に続く)

+KABAYAN SEKSİYON+ "PAGLALAHAD"

Ang Misteryo ng Kasamaan Sa paghinay sa misteryong ito, una, pinagtibay natin ang ating di matitinig na paniniwala ng ang Diyos na ating Ama ay kumakalinga sa bawat isa et sa lahat sa atin, ngayon at dito, sa lahat ng ating mga pagkaligalig at paghihirap. *Ikalawa*, sinasabi ng ating Pananampalataya na ang kasamaan na nagmula sa pagsuway ng mga unang tao at hindi mula sa anumang pagkukulang ng Diyos at ng kanyang mapanlikhang kapangyarihan.

Ikatlo, sa paglalarawan sa Pagsuway ni Adan bilang isang makabagbag-damdaming pangyayari, ipinaliwanag ng Biblia ang kasamaan moral sa pamamagitan ng misteryo ng *kalyaan*, et hindi sa kahinaan ng mga nilikha. Ang kasanaan ay hindi bunga ng ating pagiging *tao lamang*, kundi sa ating malayang pagpili sa kasamaan.

Ang malawak na misteryo ng *lahat* ng paghihirap at kasamaan sa daigdig, pisikal at moral, ay nararapat na tingnan mula sa ating pagkakaugnay sa "daigdig na nasa proseso." Naunawaan nating ang daigdig ay umuunlad sa isang umiimbulong na proseso na kaugnay ang ating sariling malayang pag-unlad sa lipunan. Ang tanging lakas na siyang humahadlang sa lahat ng kasamaan ng daigdig mula sa pagiging mahirap tiisin at lubusang mapanalanta, ay sa Diyos. Minarapat ng Diyos Ama na pumas-ok sa ganitong proseso sa pamamagitan ng pagsusugo sa Kanyang Anak sa kanyang mapangligtas na misyon at sa pagpapadala sa Espiritu Santo upang ipagpatuloy ang misyon ni Kristo sa daigdig. Patuloy Niyang inaako sa kanyang sarili ang kasanaan et paghihirap ng sanlibutan, at sa gayo'y binabago ang maaring maging sanhi ng pinakamasidhing kalungkutan upang maging bukal ito ng pag'asa, ngayon at para sa buhay na walang hanggan.

Binibigyan tayo ng espirituwal na lakas ng ating Pananampalatayang Kristiyano upang harapin ang "kalagayang pantao" sa halip na anumang solusyong intelektuwal. Ang kasamaan sa daigdig ay hindi ilang "subiraning" kailangang lutasin, kundi isang "hiwagang" nararapat harapin. Ang tatalong "mukha" ng kasamaan "kapal-aran, kasanaan" at *kamistayan* ay hindi kayang tugunan ng kahit na anumang mapangatuwiranang "karunungan pang-ulo. Ang tanging mabisa ay ang isang masiglang buhay espirituwal ng pananampalataya, pag'asa at pag'ibig sa Diyos Amang Makapangyarihan, sa pamamagitan ni Kristo Jesus na ating Panginoon at Manunubos, sa kanilang Espiritu Santong nananahan.

Kaya maaari nating pagtuunan ang salaysay sa Matandang Tipan tungkol kay Jose, at sa Misteryo ng Paskuwa ni Kristo sa Bagong Tipan, upang ipakita kung paanong makagagawa ng mabuti ang Diyos mula sa masama. Sapagkat umasa tayo sa Kanyang walang hanggan mapagmabal na lakas at awa, "alam nating sa lahat ng bagay, ang Diyos ay gumagawa ng kasama ang mga nagmamahal sa kanya" (Rm 8:28)

Katukiamo-Pilipinong Katoliko (Fr. Dino Orofio)

安と、あふれるばかりの慰めとお与えになったからである」(ペテロ・アルペ編訳『ザビエル書翰抄』上巻 岩波書店 一九七九年 版 二二〇頁)

「私たちが、危険や困難に煩わされることを、神がお許しになるのは、私たちが自己に基礎を置いて、神に依り頼むことを、怠ることのないようにしてください。そのためである」(同書 下巻 四九頁)

「ただ一つのものだけが私たちに大いなる勇気を与えてくれます。即ち、我らの主なる神が、その御あわれみによって、私たちの心の中にお置きになった願望と、その全善によって私たちに感ぜしめてくださった大いなる信頼と希望とを、神ご自身がお存じでいらつしやることであります。すべてのことは、神の摂理に依ってなされるのであり、被造物はただ神の意志ととの許容とに従う外自力を以ってしては、何一つ成し遂げ得ないものなのです」(ペテロ・アルペ『聖フランシスコ・ザビエル』一八〇頁)

「霊操」の精神として、日本人にキリスト教を伝えようとしたのです。これは、イエズス会の布教・学校教育の基本となる『イエズス会学事規定』の精神でもあり

(次号に続く)